

## 2025 年度第 3 回出版委員会議事次第

日時:2025 年 12 月 6 日(土)午前 10 時 00 分から

出席委員: 飯野、永井、阿部、小柴、古寺、茶谷、富樫、森本、山城、小松崎、中村、久保

### 報告事項:

1. 会誌編集委員会報告(小松崎):出 1
2. 生物物理編集委員の決定について(飯野):出 2
3. Biophysics and Physicobiology 編集委員会報告(中村):出 3
4. ウェブサイト編集委員会報告(久保):出 4

### 審議事項:

5. BPPB 編集委員会審議事項(中村):出 5
6. BPPB 編集委員候補推薦について(飯野):出 6
7. 第 15 回 BPPB 論文賞 公募開始について(永井):出 7
8. ウェブサイト編集委員会審議(久保):出 8

その他

## 報告事項:

### 1. 会誌編集委員会報告(小松崎):出 1

小松崎氏より報告が以下の通りなされた。

・IUPAB の特集号、座談会、アクティブマターの特集号などを発行し、解説記事としては充実している旨が報告された。巻頭言、支部だより、海外だより、キャリアデザイン談話室、特集、新企画の予定が報告された。

### 2. 生物物理編集委員の決定について(飯野):出 2

飯野氏より報告が以下の通りなされた。

・編集委員長、編集委員が任期満了のため、交代。原案通りに依頼したところ、快諾してもらった。

### 3. Biophysics and Physicobiology 編集委員会報告(中村):出 3

中村氏より報告が以下の通りなされた。

・現在、33 編まで早期公開されている。日韓学会におけるの特集号が5~6編くらいが来週には公開できる予定。今年中に 40 編くらいが公開できる予定。

・Instruction for Authors を修正した。

・J-STAGE 担当者との意見交換会を 10 月 20 日に開催した。学会からの要望を伝え、多くの問題に対しては、検討してもらえなくなった。

・Special Issue について、2つの Special Issue について、ゲストエディターが決まったことが報告された。

・BPPB Editorial Board meeting を開催したことが報告された。APC の増額に関して議論が進んでいる。

・統計について、現在 33 編発表している。今年はこの 10 年で最も Regular paper が多い。海外からのアクセスでベトナムが出てきた。永井氏がベトナムで BPPB 誌の宣伝をした効果と考える。来年は日韓の年会もあるので、韓国からのアクセスも増えるとよいと考える。

・Instruction for Authors の改訂について。AI や LMM の使い方や注意事項について記載した。情報が流出しない形(ローカル LMM)で AI を使った査読を実施し、その査読結果を Editor が閲覧することが検討中。

### 4. ウェブサイト編集委員会報告(久保):出 4

久保氏より報告が以下の通りなされた。

・配信メール形式の変更について HP アクセス数を増やすために、HTML 形式に変更した。各ニュースの URL リンクを復活させた。不達率は、HTML 形式にする前と同様状況。メールの HTML 化によって HP のアクセス数が約 2 倍増加見えている。今後も継続的に観測する。

・予算の使用状況について、151,700 円の赤字であった。

・学会 HP の修正、ニュース記事の「Facebook」と「X」のアイコンを拡大した。小中高校への講師一覧を地域別に整理する予定。

審議事項：

5. BPPB 編集委員会審議事項(中村)：出 5

中村氏より報告と審議が以下の通りなされた。

・海外からの APC 支払い方法について、APC 支払いについて問題が生じ、4,500 円を学会が負担することが提案された。また、海外からの APC 支払いは手数料が低額なカード支払いに変更することが提案された。カード払いきれない場合は、手数料をあらかじめ調べて、著者が手数料を支払うように対応する。著者へのメール内容と invoice については、著者に送付前に BPPB 編集委員側で精査する方針。

→異論なく承認された。

・BPPB web site の修正について

プロモーション・ビデオへのリンクを貼ること、Recent article の論文ごとに対応する Youtube のプロモーション・ビデオへのリンクも貼る。各論文の Citation 数と PDF の Download 数の統計のダウンロードができる機能の追加を行いたい。これらに関わる予算 242,000 円を計上したい。

→異論なく承認された。

6. BPPB 編集委員候補推薦について(飯野)：出 6

飯野氏より報告と審議が以下の通りなされた。

・次期 BPPB 編集委員候補について

上位 3 名(富樫氏、上久保氏、豊田氏)は決定。残りの 1 名は同数票が 3 名いるが、分野を考慮して村越氏としたい。

→異論なく承認された。

7. 第 15 回 BPPB 論文賞 公募開始について(永井)：出 7

永井氏より報告と審議が以下の通りなされた。

・BPPB 論文賞の推薦を募集について、公募情報について発出してよいか？

→異論なく承認された。

8. ウェブサイト編集委員会審議(久保)：出 8

久保氏より報告と審議が以下の通りなされた。

・森本、若林両委員の後任について、中村氏(東北大)、鹿毛氏(室蘭工業大)を選出したい。

→異論なく承認された。

その他

特に議題なし

## 2025 年度第 3 回男女共同参画・若手支援委員会議事次第

日時:2025 年 12 月 6 日(土)午前 11 時 00 分から

出席委員: 藤原、永井、秋山、新井、喜多、矢木、柳澤

### 審議および報告事項

#### 1. 2025 年度年会報告

- 1) 若手奨励賞、IUPAB Award、IUPAB Student Award(藤原):男女 1-1
- 2) 学生発表賞(矢木・藤原):男女 1-2
- 3) 男女若手シンポジウム(小島・喜多):男女 1-3
- 4) 前夜祭について(小島・喜多):男女 1-4
- 5) キャリア支援説明会(喜多):

#### 2. 2026 年度年会準備

- 1) 若手奨励賞(柳澤・藤原):男女 2-1
- 2) ICBBS2026 ポスター賞(矢木・藤原):男女 2-2

#### 3. 男女共同参画学協会連絡会シンポジウムご報告(小島 代理報告):男女 3

#### 4. 若手の会関係 夏の学校に関する報告(小島 代理報告):男女 4

#### 5. 女子中高生夏の学校についての報告(柳澤)男女 5

その他

## 審議および報告事項

### 1. 2025 年度年会報告

#### 1) 若手奨励賞、IUPAB Award、IUPAB Student Award (藤原): 男女 1-1

藤原氏より報告が以下の通りなされた。

・若手奨励賞の選考に関する流れが報告された。応募者は 44 名で、男性:女性:国際は 19:9:14 という比率だった。受賞は、男性:女性:国際は 4:1:0 という比率だった。受賞者は学会の Web site に掲載。3 件の IUPAB 関連の賞について報告された。

#### 2) 学生発表賞 (矢木・藤原): 男女 1-2

矢木氏より報告が以下の通りなされた。

・学生発表賞の選考に関する流れが報告された。応募者総数 123 名であり、書面審査なし、10 会場での口頭発表による 2 次審査により 36 名 (29.3%) が受賞した。IUPAB 奈良記念学生発表賞を各会場の最高得点者に贈呈した。10 会場で 10 名の予定だったが、2 会場で最高得点者が同点であったため、最終的な受賞者は 12 名となった。増えた 2 名分の賞金は、学会から支援した。受賞者は学会の Web site に掲載。

#### 3) 男女若手シンポジウム (小島・喜多): 男女 1-3

喜多氏より報告が以下の通りなされた。

・男女共同参画・若手支援委員会企画シンポジウムの開催報告が行われ、非常に盛況だったことが報告された。

#### 4) 前夜祭について (小島・喜多): 男女 1-4

喜多氏より報告と審議が以下の通りなされた。

・前夜祭の開催報告が行われ、参加者約 90 名 (修士約 36%、博士約 25%、既卒約 29%) であったこと、満足度が概ね高い企画であったことが報告された。前夜祭を通じた交流によって、年会での交流が加速した側面があった。支出は 62,681 円であり、予算 60,000 円を若干オーバー。

・来年度の前夜祭について、Student Night が該当する。若手の会は、負担が大きいため関わらないことを計画している。来年度以降はその都度、若手の会が関与できるか相談する。来年度の企画運営は、日本側は理事の小島氏と喜多氏、韓国側の 2 名が行う。Welcome Reception とパラルレルで同じ会場内で区画化してもらって行う予定。

#### 5) キャリア支援説明会 (喜多):

喜多氏より報告が以下の通りなされた。

・キャリア支援説明会の開催報告が行われ、ポスター会場のアカリクのブースの訪問者が多かったことが報告された。今年は約 100 名が訪れ 34 名が相談した (3 年前は 50 名が訪れ 8 名が相

談)。アカデミアと民間のどちらにも行けるキャリアパスを描く人が多く、アカリクと関係を重要視する意見が多かった。釜山年会でもアカリクが協力してくれる内諾が得られている。

## 2. 2026 年度年会準備

### 1) 若手奨励賞(柳澤・藤原):男女 2-1

柳澤氏より報告が以下の通りなされた。

・11月18日に、オンラインでスケジュールや懸念点を議論した。若手奨励賞は、日本生物物理学会の会員を対象とし、韓国側は対象としない。これまで入賞者に盾を贈っていたが高額であるため(税込み約17万円)、経費削減のための議論の最中。審査に関わる流れは秋山氏より引き継いだ。

### 2) ICBBS2026 ポスター賞(矢木・藤原):男女 2-2

矢木氏より報告が以下の通りなされた。

・ポスター発表において、日韓双方の学生、若手研究者を対象とした賞。受賞対象者が学生だけでないため、暫定的に「ICBBS2026 ポスター賞」と呼ぶ。IUPAB2024と同様に、審査員は設けず、参加者が投票する形式。投票のルールや受賞率などは検討中。投票結果の公平・公正性、日韓の受賞率のバランスを確保するために日韓双方から選考委員会を作る。これまで年会実行委員が主導して進めているが、理事(矢木氏)も参加して進めていく方針。Journal awardとのカップリングについて、韓国側がRSCとACSと関係があることから、それぞれの出版社から3~5件、ICBBS2026 ポスター賞の優れた受賞者にJournal awardを授与する方針。BPPB誌もカップリングすることを協議していく。

## 3. 男女共同参画学協会連絡会シンポジウムご報告(資料提出のみ):男女 3

小島氏より資料が提出された。

## 4. 若手の会関係 夏の学校に関する報告(小島 代理報告):男女 4

喜多氏より報告が以下の通りなされた。

・9月1~4日に千葉で行われた夏の学校の開催報告があった。参加人数184名(現地参加124名)、生物物理学会の年会に参加していない参加者が多い。夏の学校を期にアカデミア志望の人が増えたというアンケート結果が紹介された。去年の夏の学校に参加した後に生物物理学会の会員になった人は13%程度、なっていない人は30%程度。既に会員であった人を除くと約3分の1が入会してくれたことになり大きな成果といえる。今後も統計を続けることが重要。高校生の参加者を増やすためには、開催時期の検討が重要との意見があった。

## 5. 女子中高生夏の学校についての報告(柳澤)男女 5

柳澤氏より報告が以下の通りなされた。

・女子中高生夏の学校を8月10日に開催し、ポスター発表とデモ実験を行った。物理寄り、生物

寄りのテーマで若手の会の学生がポスター発表、発表者と高校生と年齢が近いことで、いずれも集客力は高かった。学会らの配布物は喜ばれていた。

その他

とくに議題なし

## 2025年度第3回(一社)日本生物物理学会理事会議事次第

日時:2025年12月6日(土)13:00~16:30

場所:大阪大学(オンライン開催)

出席者:理事総数 20名 出席理事 17名(代表理事を含む)

代表理事(会長)	永井 健治	理事(副会長)	藤原 郁子
理事(副会長)	飯野 亮太	理事	阿部 一啓
理事	新井 宗仁	理事	喜多 俊介
理事	小柴 琢己	理事	小島 慧一
理事	古寺 哲幸	理事	茶谷 絵理
理事	富樫 祐一	理事	林 重彦
理事	晝馬 亨	理事	森本 雄祐
理事	矢木 真穂	理事	柳澤 実穂
理事	山城 佐和子		

監事:監事総数 2名 出席監事 1名

監事	佐甲 靖志	監事	原田 慶恵
----	-------	----	-------

オブザーバー:

欧文誌編集委員長	中村 春木
会誌委員長	小松崎 民樹
ウェブサイト編集委員長	久保 稔
2024年度年会委員長	野地 博行
2025年度年会委員長	高田 彰二
2026年度年会委員長	朴 三用
2026年度年会委員	高橋 聡
北海道支部長	相沢 智康
東北支部長	柴田 穰
中国・四国支部長	松浦 宏治

陪席者:

学会事務局	末吉 建太
-------	-------

議長:代表理事(会長) 永井 健治

議事録作成者: 古寺 哲幸

## 報告事項:

### 1. 地区報告

北海道（相沢）:報 1-1

東北（柴田）

中国四国（松浦）

### 2. 2025 年度年会報告（高田）:報 2

### 3. 2026 年度年会準備状況（朴）:報 3

### 4. 国際関連委員会報告（藤原・山城・矢木） :報 4

（ベトナム生物物理学会の設立セレモニーへの参加について:永井）

### 5. 賞・助成金推薦委員会報告（藤原）:報 5

### 6. 2024 年度年会報告（野地・田端）:報 6

（東アジア I 分子生物物理学会報告:野地）

その他

## 審議事項:

### 1. 2026 年度事業計画/予算（原案）審議（永井・茶谷）:議 1

### 2. 2026 年分野別専門委員の承認（飯野）:議 2

### 3. サブグループ募集開始について（飯野）:議 3

### 4. 2028 年度 年会開催候補地について（永井）:議 4

その他

## 定足数の確認:

理事会の審議に先立ち、議長・永井 健治氏より定足数の報告があった。

理事総数 20 うち、出席者 17 により過半数を超えた。

## 報告事項:

### 1. 地区報告

#### ●北海道（相沢）:報 1-1

相沢氏より報告が以下の通りなされた。

- ・例年通り 6 万円の交付申請を行った。
- ・繰越金を減らしながら活動している旨が報告された。
- ・交付金の使途（主に講演料、夏の学校の支援）について報告があった。
- ・3 月に東北支部と合同で支部大会をハイブリッドで行う予定であることが報告された。

#### ●中国四国（松浦）

松浦氏より報告が以下の通りなされた。

- ・若手の会 中国四国支部主催で 11 月 8 日（土）の午後に岡山大学で「中四国若手クライオ電顕ワークショップ」が開催。
- ・2026 年度の支部大会は愛媛大学松山キャンパスで 5/16, 17 の土日に開催予定。

#### ●東北（柴田）

柴田氏より報告が以下の通りなされた。

- ・3 月に北海道支部と合同で支部大会をハイブリッドで行う予定であることが報告された。

### 2. 2025 年度年会報告（高田）:報 2

高田氏より報告が以下の通りなされた。

#### ●全般について

- ・無事に奈良年会が開催できた旨が報告された。
- ・講演数は名古屋年会とほぼ同じ。一般公演が少し少ない。
- ・会計は最後に予期していなかった支出があり、72 万円弱の赤字となった。名古屋年会よりも収入は少し多かったが、支出も多かった。
- ・今回の年会の特徴、①初めて理事会主体の学会開催となった。事実上は垣内氏がほとんどの用務をこなした。②若手の会前夜祭の開催。③ウェルカムレセプションの開催。④イブニングセッションの開催。⑤QR スキャンアプリの導入。
- ・実行委員会は京都を中心に関西の関係者で構成した。コアメンバーは 16 名（資料で下線が引かれているメンバー）で、メインは寺川氏、垣内氏、目黒氏、高田氏の 4 名で進めた。
- ・プログラム編成・校正を極めて短時間（1 週間ほど）で行う必要があり、全体を通じてもっとも忙しい時期となった旨、プログラム編成では生成 AI を利用することが省力化に重要。

#### ●講演会場について

- ・1F の4つの会場が若干狭く、オーガナイザーの予想を超える集客があり、会場に入りきらない場合があった。会場に入りきらない場合の統計値は概算。

#### ●ポスター・企業展示会場に関するアンケートについて

- ・企業からは概ね好評であったこと、同じ分野でもポスターボードが離れていることについての

不満があったこと、ポスター会場が狭かったという意見があったことが報告された。

・学生発表賞の応募数が激減した(今回 122 件、名古屋 187 件)。理由は不明。

#### ●高校生発表について

・9 月後半に年会を開催すると、2 期制の高校の前期末試験と重なり、常連校が参加できない問題があった。会場は盛況だったが、参加してくれる高校を集めるのが大変だった。

#### ●プログラムに関するアンケートについて

・BPPB 論文賞受賞講演シンポジウムを学生発表と並列した結果、前者の参加者が非常に少なかったため、検討課題。見たいシンポジウムが並列して実施されていて参加できないという不満、イブニングセッションは参加者が少なく寂しい一方、少し気軽に議論できる雰囲気だった意見が寄せられた。

・参加者数について、参加者は 1610 名。名古屋年会が 1686 名だったので、微減。協賛した学会からも参加があった。

#### ●企業協賛について

・名古屋年会と同程度(やや少ない)の協賛を得た。アンケートによれば企業満足度は高いと分析された。I 社から協賛費が高額という意見が寄せられた。

#### ●参加証と QR コードについて

・寺川氏が QR コードの読み取りアプリを製作した。企業から非常に便利という意見が多数だった。一方で、うまく読み込めない、タイムアウトしてしまって何度もログインしなければいけないという不満の意見もあった。

#### ●懇親会・ウェルカムレセプションに関するアンケートについて

・ウェルカムレセプションは好評だった。日本酒に比べて食事の量が少なかったという不満も寄せられた。懇親会について、時間が短い、混雑していたという不満が寄せられた。

#### ●会計について

・参加費を 1 万円から 1.2 万円の増額。支出項目について、名古屋年会と大きな変化はないが、会場費が名古屋と比べて大きい。設営・撤去、人件費、機材費の部分が最初の見積もりに入っておらず、直前に 50 万円程度追加が必要であることが判明(赤字の主な原因)。アルバイト費用も増えた(多くのアルバイトの人員が京都から通う必要があり、会場までの交通費を支給したため)。Confit(約 135 万円)、Zoom 配信(約 100 万円)を止めて、支出を削減した。一方で、ウェルカムレセプション(約 100 万円)により支出が増えた。

#### ●その他

・実行委員会では、垣内氏、目黒氏の貢献が非常に大きかった。特に、垣内氏の負担が大きいことが懸念。企業協賛集めが最も苦勞し、全体の予算の 6 割を占める。この運営の構造を変える余地がある。QR コードの読み取りについては、概ね好評だった。必要があれば次回以降も利用して欲しい。高校生発表について、別会場で実施されていて会員との交流がないのが

課題。年会全体として、大きなトラブルもなく実施できた。アンケート結果は報告資料に掲載。

→高田氏を始め、実行委員への謝辞が述べられた。(永井)

→70万円程度の赤字が出たこと、企業からの収入を得ることが大変なことを考慮すると会費を1.3万円にすることも検討してもいいかもしれない。その場合の検討は再来年度以降の年会に向けたものとなる。(永井) →収入が企業協賛に依存しているということについて、企業協賛からの収入の減少が今後懸念されるということか?(飯野) →企業に依頼することに最もエフォートを割いた。企業協賛に依存しているという現状や、収入を自分たちで確保できれば、そのエフォートが軽減できると考える。(高田) →参加費から収入を得ることか?(飯野) →支出を減らす方向もある。今のやり方だと、実行委員がお金を集めるのに苦勞する。(高田)

→垣内氏の負担が大きかったことに対するインセンティブはあるのか?垣内氏は韓国年会も担当されるので、朴氏や高橋氏に状況を確認する。(永井) →高橋氏が会長だったとき、垣内氏に業務委託契約を結んで依頼することになったという理解でよいか?(相沢) →その理解で正しい。(末吉) →時給にすると雇用を継続してできなくなる恐れがあるので、サステナビリティを考慮して業務委託契約とした経緯がある。負担が多いのであれば、業務委託契約の報酬を増やすことは一案といえる。(相沢) →相沢氏が説明した経緯がある。ただし、想定されていた業務量と実際の業務量に解離がある可能性がある。サステナビリティの観点から、契約額を含めて契約を見直すことも重要と考える。(秋山) →垣内氏への報酬は毎月一緒となっている。(永井) →年間での金額が決まっており、それを月で割っている。予算の審議と関わっているので、年度内に契約書の更新なども含めて進める必要がある。(末吉) →垣内氏が九州年会をサポートするにあたって出張費を学会に申請してもよいか?(森本) →学会から支出すべきなので、事業計画に含めて予算計上して欲しい。(永井)

→Zoomにはどれほどのアクセスがあったのか?(飯野) →AE企画からデータを提供してもらう。(高田)

→プログラム編成で生成AIが有用だったとあったが、やり方が確立しているのであれば引き継いで欲しい。(飯野) →ChatGTPのプロンプトができていたので、それを引き継げる。有用であれば、改良しながら活用して欲しい。(高田)

### 3. 2026年度年会準備状況(朴):報3

朴氏より報告が以下の通りなされた。

#### ●全般について

・実行委員会を12回(2025年10月8日)、13回(2025年11月5日)、14回(日韓合同、2025年11月14日)と行った。韓国側も独自で行っているが、朴氏は韓国側の実行委員会にも参加している。

・奈良年会での「釜山イベント」について、399件のアンケート回答があった。懇親会のメニュー、Excursionの行先を検討する際に活用。韓国の実行委員会から送った賞品が関西国際空港で税関を通過できず、奈良年会に届かなかった。奈良年会の終了後に一部の賞品は税関を通過できたため、来年の蛋白質学会でのプロモーション活動で利用予定。

・全実行委員の役割分担が決定した。詳細は資料に記載。

#### ●協賛・財務について

・予算計画を作成するために MJ パートナーズと協議している。協賛の申込み用の Google フォームを作成した。趣意書(日本語、英語、韓国語)を作成し、企業に送付した。韓国では協賛獲得活動をしていて、いくつかの企業から確約を得ている。助成金は日本側では万博 70 周年記念基金に申請済みで、それ以外の 6 つの財団に申請、または申請予定。

#### ●プログラム・シンポジウムについて

・BEXCO Convention Hall 1F の 10 会場を予定。150 名/会場の規模、パーティションをなくせば 300 名収容可能。ポスター・展示などは 2F、Plenary lecture, Nobel prize lecture, banquet, large symposium は 3F の Hall (2400 名収容可能) で行う。シンポジウムは 60 件開催予定、そのうち 20 件は韓国の学会が例年行っているトップダウン方式でシンポジウムを企画。残りの 40 件が例年同様の形式で公募を開始(締め切りは 2026 年 1 月 31 日)。日韓共同企画を推奨しているため、韓国研究者紹介依頼フォームを準備してある。決定しているプログラムの日時は資料に記載(資料に 2026 年 12 月とあるが 11 月の間違い)。Plenary lecture は地域、分野、ジェンダーバランスを考慮して招待者を検討中(日本、韓国、ヨーロッパ、アメリカから各 1 名を計画)。Excursion は 25 日の午後、現在企画中。Student Night では 2 つのパートを予定、日韓 8 名の研究者・学生による口頭発表と、1 分間程度のフラッシュトークかグループワークを検討。

#### ●ウェブサイト・Social Media について

・ウェブサイトは既に立ち上がっている。問題点は順次修正している。SNS は X と Instagram を検討中で、X は奈良年会のアカウントを引き継ぐ予定。

→11 月 23 日の Welcome Reception, Sponsor's Night, Student Night が企画されているが、同日に独立で開催されるのか?(永井)→そのように予定している。(朴)→Sponsor's Night, Student Night はまだ具体化していない。別の日にするようにする。(高橋)→Student Night は、日程的に他の日程に入れられないので、Welcome Reception の大きな部屋の一画を使いたいと考えていた。若手とそうでない人の交流の場となればと考えていた。(小島)→Welcome Reception と Student Night はマージしているという理解でよいか?(永井)→その通りで、16 時から Student Night が始まり、その後 19 時から Welcome Reception にマージするという流れ。(小島)

→年会では例年、高校生によるポスター発表があったが、釜山年会でも企画されているか?(永井)→韓国側では想定していなかった。(朴)→日本側からの参加は想定していないか? Super Science High school の学生は参加するかもしれない。11 月のこの時期に高校生が参加できるかは分からないが、釜山は近いし、旅費もそれほどかからないので可能性はある。(永井)→今まで会議の議題に上がっていなかったが、議題に上げてみる。(高橋)

#### 4. 国際関連委員会報告(藤原・山城・矢木):報 4

山城氏より報告が以下の通りなされた。

#### ●奈良年会での国際交流について

・2 国間・3 国間シンポジウムが 4 つ開催された。学会初日の 9 月 24 日に Leadership & Global Exchange Night を奈良ホテルで開催し、親睦を深めた。

●Asian Biophysics Association (ABA)について

・2026年1月12-14日に香港科技大で開催される。日本から8名が参加予定。西坂氏が、ABA President & International Advisory Committee、角田氏と山城氏が Scientific Committee を務める。野地氏が Plenary Speaker。ABAは現在、香港、中国、韓国、台湾、インド、豪、日本から参加しているが、周辺のアジアの研究者に参加を交渉中。ABAへの参加に関する若手の支援として6万円/人を4名に支援予定。

●IUPAB 関連について

・2026年韓国年会が日韓共同開催ということで、特別に5000ユーロ(IUPAB awardに500ユーロ、学生旅費助成金に4500ユーロ)の支援が承認された。日本がIUPABに貢献したことが評価されていると聞いている。

●IUPAB Physics of Life 賞について

・日本物理学会より安藤氏(金沢大)を推薦した。

●2026年韓国年会でのジョイントシンポジウムについて

・日本と韓国だけで国際的と考えるので、それ以外での2国間シンポジウムは企画しない。韓国・日本以外の研究者が自費で参加する場合は一般のシンポジウムと同等に扱う。オーストラリアの生物物理学会が50周年であるため、イベントを行うかなどは西坂氏が対応中。

永井氏よりベトナム生物物理学会の発足イベントへの参加について以下の通り報告された。

・2025年9月17~19日にベトナムで行われた NanoBioCoM2025 の中で行われた。ベトナム内の研究者の長年の祈願であった生物物理学会が、国家に認められ設立した。学会設立は、ベトナム国内の新聞・メディア等でも取り上げられた。永井氏も発表し、会長の立場で日本生物物理学会の活動、BPPB誌を紹介した。BPPB誌が安価な掲載費であることを紹介したから、ベトナムからの Web page へのアクセスが増えた。金沢大学の WPI のナノ生命科学研究所とベトナム生物物理学会の交流が盛んだが、それ以外の分野の研究者も多いので、2国間のシンポジウムなどを企画していければと考える。IUPAB への加盟も承認されたことから、今後ベトナムのプレゼンスが高まっていくことが期待される。

5. 賞・助成金推薦委員会報告(藤原):報5

藤原氏より報告が以下の通りなされた。

・推薦結果一覧について推薦や採否の近況が報告された。理事からの推薦が少ない。名前が挙がってきたことがある人が何回も推薦され、申請している状況。より広い範囲で推薦して欲しい。

→推薦者がいない賞がいくつか散見され、非常にもったいない。学会が推薦して、受賞していくことが学会のブランド力を上げることに繋がるので、積極的に推薦していきたい。他薦だけでなく、自薦もどんどん進めていくべき。事務局から Web ページで募集がかかっていることは案内しているか?(永井)→Web ページとメール配信で、月1回の頻度で情報を上げている。

(末吉)→それらの Visibility を上げることは重要と考える。(永井)→育志賞に関して、他組織から既に推薦を受けているため生物物理学会からの推薦を受けていない可能性がある。申請書を読むと、複数の組織から推薦を受けているケースを見る。それらの申請が優位に働くことはないが、ネガティブに働くことはないので、どんどん生物物理学会からの推薦を利用していくべき。(秋山)→受賞には応募者が所属するコミュニティから評価されていることも指標になるので、応募者が複数の組織から推薦されていることは有利に働くことが推測される。(永井)

## 6. 2024 年度年会報告(野地・田端):報 6

野地氏より IUPAB2024 の報告が以下の通りなされた。

### ●監査報告書について

・税理士により監査された。収支は、144,200 円の黒字となった。この余剰金は IUPAB との約束で、半額は開催側(今回の場合は日本)、もう半額は IUPAB に渡すとなっていた。しかし、少額なため奈良年会で IUPAB award に充て、IUPAB に返金しなくてもよいことになった。実際に、奈良年会で IUPAB award の賞金として利用された。

### ●第 5 回 East Asian Single-Molecule Biophysics symposium (2026EASMB) について

・中村氏が会長だったときに日韓の 2 国間の研究交流を促進するために始められた研究会、3 回目くらいで東アジアに地域が拡張され、中国、シンガポールが加わった。最初は岡山年会で始まり、開催地が各国を巡っている状況。この会議は、もともと学会の企画で始まっていて、それが発展的にいい形で広がっていることをリマインドしたい。来年度が日本開催なので(12月に沖縄)、学会の国際化活動の一環として支援して欲しい。組織委員長は野地氏から寺川氏(京都大)に引き継ぎ、野地氏は副委員長となる。委員としては、永井氏、藤原氏(京都大)に加わっていただく。日本以外で開催のときは、交通費以外(参加費、宿泊費、食費)は開催国が負担してくれていた。今回の日本の会議で、開催予定経費を学会から少しでも支援して欲しい。

→国際担当の副会長の藤原氏を経由して予算計上し、理事会で協議したい。(永井)→予算計上に際して、理事会で議論。(藤原)→疑問点などあればこの場で答えたい。(野地)→なぜ沖縄を選定したか?(永井)→日本の生物物理学会らしく、フラットに楽しく議論する雰囲気を楽しんでもらう。岡山、京都、筑波で開催されたので、それ以外の場所として沖縄が上がった。寺川氏が沖縄出身ということ、他の委員の意見も賛成だった。他の国の人たちも喜んで来てくれるだろうとの見込みもあった。(野地)→学会のためになるということが大前提。一般の会員のためのメッセージが重要と考える。(佐甲)→若手を呼びたい。若手の人のためのオーラルのスロット、ポスター発表をシンガポール開催の会から設けた。沖縄の会議でも若手のサポートに学会からの支援を主に充てたい。(野地)→シンガポールの会議に参加して思ったことは、参加者の数は 100-150 名と多くないが、ハイレベルな発表と議論だった。学生も積極的に議論に参加していたのは印象的だった。このような会議に日本の若手を送ることは学会の発展に寄与すると考えるため、支援に値すると考える。(永井)

●プログラ国際的なアドバイザリーボードの設定について

・学会に自主的に参加していただいている国外の方(例えば、台湾の Hung-Wen Li 氏のような方)に、負担にならない範囲で(1年に1回程度)、学会の国際化戦略に関して助言をもらえるような制度があるとよいと考える。

→1年に1回でも直接来日するのは大変なので、オンライン会議も設け、ハイブリッドにすると負担が減ると考える。何らかのインセンティブを与えるのもよいと考える。(中村)→負担を少なくすることが重要。東アジアだと時差は少ないのは好都合。実施してみて、そこから形を整えていくという方針がよいと考える。アドバイスをもらうのは、学会運営の全体なのか国際化戦略についてなのか?(秋山)→年会や年会内の交流事業、BPPB についてのアドバイスを意図していた。(野地)→この件に関して、Hung-Wen Li 氏は賛同してくれているか?(藤原)→賛同してくれている。(野地)

その他

とくに議題なし。

## 審議事項:

### 1. 2026 年度事業計画/予算 (原案) 審議(永井・茶谷):議 1

永井氏と茶谷氏より報告と審議が以下の通りなされた。

#### ●事業計画と予算(原案)について

・事業計画書と予算のフォーマットを変え、各事業の担当者の欄を新たに設けた。事業計画と予算案の関係をしっかりとリンクしたい意図がある。年度途中で急に必要な支出がある可能性がある。それらに柔軟に対応するために、事業に“その他の事業”という項目を設け、予算として予備費を計上したい。次回の第 4 回の理事会で予算案の初案が提出され、第 5 回で更新版が提示され、審議していくという流れ。

→事業計画で挙げられていない新規事業を予算請求をすることは可能か?(富樫)→可能。(永井)→BPPB 誌の Web ページの改修の予算もここに請求すべきか?(飯野)→学術誌・学術図書の発行に関わるところで、新しい項目を設けてもらえればと考える。(永井)

・事業内の各項目とその予算との関連を参加者全員で確認した。事業の追加の提案があれば欲しい。

→釜山年会の学生発表賞はなく、渡航費の援助を行うという理解だが、そのように修正依頼すればよいか?(矢木)→その通り。(永井)→学会からの支援ではないので、この項目ではないのでは?(末吉)→IUPAB からの支援額は 80 万円程度なので、それで十分であれば計上しなくていいが、学会からさらに追加で支援を行う場合は形状の必要があると考える。(矢木)

→釜山学会の要旨集はどうするか?IUPAB2024 のときは要旨集を BPPB 誌のサプリメントとして公開した経緯があった。日本側の責任者は誰になるのか?(中村)→朴氏、高橋氏、池内氏に確認する必要あり。(永井)→IUPAB のときはリンケージだったので、釜山年会は MJ Partners かもしれない。3 氏に確認する。(末吉)

→お金が絡む事業については、それが分かるマークがあるとよいのでは?(秋山)→そのように修正する。(末吉)

→今年度行った BPPB 誌の Web ページの改善費はどの予算から出ているのか?(飯野)→その他の事業から支出した。この予算の内訳を計算するシートは以前の事務局から引き継いだもの。事業と予算の関係が不明瞭なところがある。(末吉)→シートを事業と予算の関係が明確になるように工夫していくべき。(永井)

### 2. 2026 年分野別専門委員の承認(飯野):議 2

飯野氏より報告と審議が以下の通りなされた。

#### ●直近 4 年間推薦がない分野を停止することについて

・今年は該当分野がなかった。

#### ●新規に提案を受けた分野

・3 分野(量子センサー、DNA ナノテクノロジー、核酸工学)が提案され、採択したい。以上の変更により、総分野数は 166 となる。会長、副会長で委員と分野を確認し、マッチしていない

場合は変更したり、該当者なしとしている。

→DNA ナノテクノロジーと核酸工学は似ているが、似ている分野はマージしてもよいとも考える。(秋山)→人口が少ない分野も広げていくという規定があるため、分かれていてよい。(飯野)→審議ののち承認された。

### 3. 「サブグループ」支援制度の応募について(飯野):議3

飯野氏より報告と審議が以下の通りなされた。

●サブグループの募集を行いたい。現在6件か7件ある。2026年3月31日締め切りで、最大12件を採択予定。各サブグループには活動報告をしっかりと提出してほしい。報告を学会のWeb pageに掲載したい。

→報告の義務に関して募集要項に記載があるか?(永井)→支援金の収支に関する報告の義務はあるが、活動報告の義務はない。(飯野)→活動報告をして欲しい。その記載を募集要項にしてはどうか?(永井)→邦文誌のほうで発信してもらってもよい。(小松崎)→賛成します。(飯野)→中高生が参加できるサブグループもあっていいのでは?(小松崎)→サブグループでも将来の会員を集める場であったほうがよいので、非会員の人にも参加してよいと考える。(飯野)→来年度は12件(5万円/件)の採択を予定しているので60万円の予算要求をしているということではどうか?(永井)→その通りです。(末吉)→学会員以外の方が応募できるのか?(永井)→応募は学会員が10名以上必要。(飯野・末吉)→応募の資料がここでの議論の意図が伝わらないのでは?非会員を含めることが望ましいというようなニュアンスを加える?(秋山)→募集の文面に、“iv)新たな会員の獲得につながるもの”を加えるのはどうか?(永井・飯野)→審議ののち承認された。

### 4. 2028年度 年会開催候補地について(永井):議4

永井氏より提案が以下の通りなされた。

●2028年度の年会開催について

・これまでの開催地や年会委員長のリストを閲覧しながら、関東が候補となり得ることが議論された。群馬年会がオンライン開催だったので、群馬、または北関東が候補となり得る。または、しばらく開催されていない、山陰、四国地方(2008年の徳島以外の高知、高松、松山)も候補となり得る。

→各支部が年会実行委員会を作ることが難しいということから、理事会主体の実行委員会となった経緯がある。地域というよりも、誰に実行委員長を依頼するかが重要。(飯野)→次回以降に複数名の候補者を選出したい。各理事が少なくとも1名推薦するというところでどうか?(永井)→この方針で進めていくことが承認された。

その他

とくに議題なし。

**連絡事項:**

1. 次回理事会日程について(永井)  
2025年度第4回理事会  
日時:2026年1月24日  
場所:(TV会議)  
2025年度第4回男女若手委員会  
2025年度第4回出版委員会を同日開催予定

その他の発議を求めたところ、格別なしと認められたので、議長は16:30に閉会を宣言して散会した。  
上記の議決を明確にするため、定款第六章第三十三条の規定によりこの議事録を作成し、代表理事及び  
監事が次に記名押印する。

2025年12月6日

一般社団法人 日本生物物理学会 2025年度第3回理事会

代表理事      永井 健治 (印)

監事            佐甲 靖志 (印)

監事            原田 慶恵 (印)